

大学進学における進路選択プロセスに関する研究

—進路決定因子と相談相手を中心に—

○林如玉*, 宮本友弘**, 倉元直樹**

東北大学教育学研究科*, 東北大学高度教養教育・学生支援機構**

1. 問題と目的

センター試験の自己採点の結果を踏まえて最終的な出願大学を決定する受験生が大半であると言われている(寺下ら, 2008)。例えば、西郡(2010)はセンター試験後の受験校決定プロセスについて調査した。しかし、それ以前高校生が大学を選択するため、どのような行動を行っているのかという視点も特に重要である。

本研究では高校生の大学進学における進路選択プロセスを明らかにする。主に、高校生が進路を選択する時どのような要因を重視しているのか(以下「進路決定要因」と略称)、誰を相手としているのか(以下「相談相手」と略称)に焦点を当てて分析を試みる。

2. 方法

2.1 調査方法

2019年2月～4月に日本全国11校の高校生を対象に、ウェブにおけるアンケート調査を行った。調査対象者数は総計8,170名(1年生: 2,735名, 2年生: 2,382名, 3年生: 1,535名)であった。

調査実施は各高校の担当教員に依頼し、QRコードが掲載された「研究協力をお願い」を調査対象者に配布した。調査サイトへのアクセスは任意とした。ウェブ調査の冒頭に調査

内容及び倫理的配慮を説明する「研究同意書」を提示し、同意した者のみに回答を求めた。なお、本調査は東北大学高度教養教育・学生支援機構で論理審査委員会の承認を得て実施した。

2.2 調査内容

調査票のうち、本報告が分析に用いた変数は以下のとおりである。最初に性別、コース、学年について尋ねた。相談相手については8項目を設定(表2参照)し、それぞれの相手と相談する頻度を4段階評定で尋ねた。さらに、進路決定要因に関する項目については、中国の高校生を対象とした予備調査(林・倉元, 2019)を参考に19項目(5段階評定)を設定した。予備調査の結果「合格可能性」要因の天井効果が大きかったため、「合格可能性」を調整変数とした場面想定法を用いることとした。

3. 結果と考察

3.1 概要

有効回答者数1,089名、回収率は14.1%であった。男子は483名(44.4%)であり、女子は604(55.5%)であった。学年別には、1年生は460名、2年生は459名、3年生は170名であった。

3.2 進路決定要因の因子分析

「進路決定の理由」に関する 19 項目について因子分析（主因子法）を行った。スクリー図から 3 因子が妥当と判断した。プロマックス回転後の結果を表 1 に示す。第 1 因子は、進学先として決定した大学の教育内容、就職状況といった大学の中身を示唆する内容であることから、「大学の中身」と命名した。第 2 因子は、生活や住まいといった生活環境を示唆する内容であるから、「大学の環境」と命名した。第 3 因子は、奨学金、学費といった大学の費用に関わる内容であることから、「大学の費用」と命名した。各因子に高い負荷量を示した項目得点の平均値を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。アルファ係数を求めたところ、「大学の中身」は.871、「大学の環境」は.826、「大学の費用」は.788 と十分に高い信頼性が得られた。

次に、3 尺度の学年差と性差について検討した。得点が高いほど、因子で表された「進路決定理由」よりも「合格可能性」を重視して大学を選択する程度が強いと解釈される。

学年と性別を要因とする 2 要因配置の分散分析を行ったところ、「大学の中身」について交互作用は見られなかったが、性別の主効果($F(1,1068)=9.118, P<.01$)、学年の主効果($F(1,1068)=8.167, P<.01$)が有意であった。「大学の環境」も交互作用は有意ではなかったが、性別の主効果($F(2,803)=6.881, P<.01$)、学年の主効果($F(1,803)=16.822, P<.01$)がともに有意であった。「大学の費用」に関しては、交互作用も主効果も見られなかった。

表 1 「進路決定要因」の因子分析の結果（プロマックス回転後のパターン行列）と因子間相関

	I	II	III
V11.8 学びたい学部・学科・コース	0.852	-0.351	0.201
V11.7 指導して欲しい先生	0.691	0.079	-0.022
V11.5 研究の水準	0.685	0.077	-0.030
V11.20 自分が行きたいと思う	0.587	0.005	-0.013
V11.1 社会的評価	0.508	0.328	-0.214
V11.10 校風や雰囲気	0.500	0.085	0.138
V11.11 施設・設備	0.496	0.234	0.120
V11.9 学部・学科・コースが有名	0.417	0.405	-0.109
V11.2 就職条件	0.381	0.226	0.028
V11.16 売店や食堂	-0.095	0.758	0.128
V11.15 サークルや部活動	-0.050	0.720	0.091
V11.19 寮が充実している	-0.042	0.645	0.083
V11.3 地域	0.065	0.519	-0.137
V11.4 通学	0.060	0.516	0.036
V11.18 交通が便利なところ	0.134	0.497	0.198
V11.6 大学院	0.341	0.395	-0.122
V11.13 生活費	-0.029	0.061	0.803
V11.12 授業料	0.094	-0.108	0.743
V11.14 奨学金制度	-0.047	0.307	0.520
因子間相関 I		0.668	0.448
因子間相関 II			0.540

「大学の中身」と「大学の環境」における性別の主効果について Tukey の HSD 法による多重比較（5%水準）を行ったところ、い

れも女子が男子よりも有意に「合格可能性」を重視する傾向が見られた。「大学の中身」と「大学の環境」における学年の主効果については、3年生が1, 2年生よりも有意に「合格可能性」を重視する傾向が見られた。

3.3 相談相手のクロス集計

相談相手8項目については、得点が高いほど、相談頻度が高い傾向と解釈される。各項目得点の平均値を表2に示す。「父」との相談頻度が最も高く、唯一、項目平均値が3を超えた。

表2 相談相手の平均

	度数	平均値	標準偏差
父	1086	3.01	0.876
学校の先生	1078	2.52	0.862
友だち	1078	2.44	1.016
母	1069	2.29	1.018
家庭教師あるいは塾や予備校の先生	1060	1.66	1.007
兄弟姉妹	1048	1.53	0.86
先輩	1065	1.52	0.808
その他の家族や親戚	1062	1.44	0.761

次に、各相談相手について、相談頻度を順序尺度とみなして性別とのクロス集計表を作成した。それぞれの相談相手についてカイ2乗検定を行ったところ、「父」($\chi^2(3)=47.496, p<.01$)「母」($\chi^2(3)=10.786, p<.05$)「兄弟姉妹」($\chi^2(3)=9.626, p<.05$)「その他の家族や親戚」($\chi^2(3)=12.108, p<.01$)「友達」($\chi^2(3)=41.025, p<.01$)に有意差があった。

女子が男子より高い頻度で相談する傾向が見られたが、唯一、異なる特徴を示したのは「母」であった。図1で示すように、「頻

繁にあった」を選択した比率が高かったが、母と相談することは「1回もなかった」比率も女子が男子を上回った。

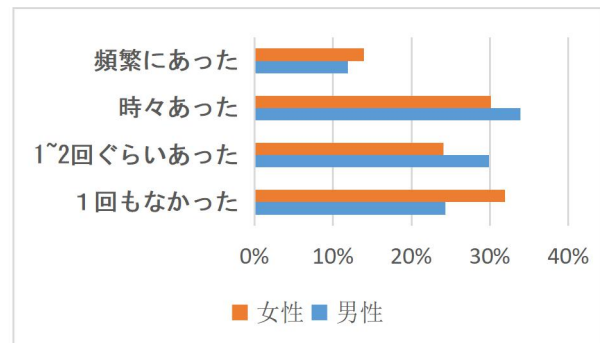


図1 「母」との相談頻度

次に、各相談相手について、相談頻度を順序尺度とみなして学年とのクロス集計表を作成した。各相談相手についてカイ2乗検定を行ったところ、「父」($\chi^2(6)=55.022, p<.01$)「母」($\chi^2(6)=14.726, p<.05$)「学校の先生」($\chi^2(6)=123.241, p<.01$)「家庭教師あるいは塾や予備校の先生」($\chi^2(6)=39.176, p<.01$)「先輩」($\chi^2(6)=22.816, p<.01$)「友達」($\chi^2(6)=52.830, p<.01$)に有意差があった。3年生がほかの学年より高い頻度で「先輩」以外の各相談相手に進学先について相談する傾向が見られた。

3.4 相談相手に関するクラスタ分析

相談相手の各項目得点について、Ward法によるクラスタ分析を行った。デンドログラムから、4つのクラスタに分類することが妥当と判断した。4群はそれぞれの特徴により「塾や家庭教師に相談」「家族に相談」「皆に相談」「相談なし」と命名した。

各群の性差と学年差を見るため、クロス集計表を作成してカイ2乗検定を行った。相談タイプと性別の関連は有意であった($\chi^2(3)=3$

3.463, $p < .01$)。残差分析(5%水準)の結果、「塾や家庭教師に相談」のグループでは、女子の比率が男子よりも有意に高かった。一方、「相談なし」のグループでは、男子の比率が女子よりも有意に高かった。

相談タイプと学年のカイ2乗検定の結果も有意であった($\chi^2(6) = 14.602, p < .05$)。残差分析(5%水準)の結果、「皆に相談」のグループでは、1年生の比率が他の学年の学生に比べて、有意に低かった。「相談なし」のグループでは、1年生の比率が他の学年の学生に比べて、有意に高かった。

次に、4つのクラスタを独立変数、進路決定因子の3つの下位尺度「大学の中身」「大学の環境」「大学の費用」を従属変数として分散分析を行った。その結果、「大学の中身」のみに有意な群間差がみられた(大学の中身: $F(3, 1016) = 2.635, P < .05$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「塾、家庭教師に相談」群が「大学の中身」に関して他の群よりもより「合格可能性」を重視した進路選択を志向する傾向が見られた。

4. 考察

本研究は高校生対象のアンケート結果を分析し、進路決定要因と相談相手を中心に高校生の大学選択プロセスを検討した。結果、進路決定要因を「大学の中身」「大学の環境」「大学の費用」の3因子に分かれた。この結果は中国でやった予備調査と同じ結果なので、普遍性はあると言える。

学年差について、1年生はまだ大学選択に

関する意識は希薄で、自分の進路について人と相談することが少ない。それに対して、3年生は1、2年生より多くの人と相談する。そして、「大学の中身」要因に関して、3年生の方は合格可能性を重視して、現実的に大学を選ぶと言える。

性差について、女子は男子より合格可能性を重視し、進路について多くの人に相談する。しかし、なぜ「母」と1回も相談しなかった比率に関して、女子は男子より高い理由はまだ解明されていない。

相談相手について、大学の進学はお金と関わるので、進路について父と高い頻度で相談する。「塾や家庭教師に相談」「家族に相談」「皆に相談」「相談なし」の4タイプの中、大学の中身について「塾、家庭教師に相談」タイプの方は「相談タイプ」の人より合格可能性を重視する。

高校生は大学を選択する過程に、進路決定要因と相談相手以外にも他の活動があるので、今後はその他の活動も入れて、進路決定プロセスを検討する予定である。さらに、日中高校生の大学選択における進路選択プロセスを比較するため、中国で同じ内容のアンケート調査を行う予定である。

「謝辞」

本研究は JSPS 科研費(基盤研究[A]JP16H02051)の助成に基づく研究成果の一部である。